

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22792253

研究課題名(和文)日本の訪問看護実践にみられる行動と信念に関する研究

研究課題名(英文)Study of Behavior and Beliefs Observed in Visiting Nursing Practice in Japan

研究代表者

辻村 真由子(TSUJIMURA, Mayuko)

千葉大学・看護学研究科・講師

研究者番号：30514252

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本の訪問看護実践に特徴的な行動と信念、およびそれらに変化をもたらす要因を明らかにすることである。まず、質的研究論文の文献レビューと熟練訪問看護師・新人訪問看護師へのインタビュー調査により、「利用者・家族とのかかわり方」「看護職者としての役割」などの側面における訪問看護師に特徴的な行動と信念を明らかにした。次いで、病院での勤務経験をもつ新人訪問看護師を対象に複数回の経時的なインタビュー調査を行い、病院経験と対比した戸惑いや葛藤、視点の変化を経験していること、これらの戸惑いや葛藤は自身の経験や同僚とのカンファレンスによって変化したことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to elucidate characteristic behavior and beliefs in actual visiting nurse practice in Japan and factors that bring about changes in them. First, based on a review of qualitative research papers and interview surveys of experienced visiting nurses and novice visiting nurses, characteristic behavior and beliefs of visiting nurses in terms of "the relationship with home care recipients and families," "role as a member of the nursing profession," etc. were elucidated. Next, several interview surveys over time of novice visiting nurses who had experience working in a hospital were conducted to elucidate their having experienced confusion, conflicts, and changes in point of view in comparison with their hospital experience, and their confusion and conflicts having changed as a result of their own experience and conferences with coworkers.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学、地域・老年看護学

キーワード：訪問看護師 新人訪問看護師 行動 信念

1. 研究開始当初の背景

(1)日本においては、療養上の重要な場面において家族の意向が直接的・間接的に反映されがちであることや、訪問看護師が療養者と家族間のコミュニケーションを促進するなどの家族員間の関係性に働きかける支援を積極的に行っていることが明らかにされている(本田ら 2006)。また、訪問看護師に求められる能力として、「利用者の生活場面で看護過程を展開する力」「利用者の家族との関係を構築する力」「家族のケア能力を向上させる力」「他職種との連携による問題解決能力」が明らかにされている(王ら 2008)。人間は、直接あるいは間接的な経験をする事によって、既存の知識・スキル・信念の一部が修正されたり、新しい知識・スキル・信念が追加されるが(松尾 2006)、病院から在宅へ実践の場を移した看護職者においても、特有の経験を通じた学習によって能力開発がなされていると考えられる。

(2)近年、人間行動を理解する理論として、スキーマ理論が注目されている。スキーマとは「過去の反応や体験が組織化されたもの」で、スキーマ理論(西田 2006)とは「人間は同じような状況下で周りの人々とコミュニケーションしているうちに脳内にスキーマが形成され、それがその文化特有の行動様式を形作る」というものである。異文化間コミュニケーション学問分野では手続きスキーマと呼ばれる行動ルールを用いた日本人と米国人の間のコミュニケーションの問題についての比較研究等が行われている(Nishida et al. 1998)。

(3)研究者はこのスキーマ理論をもとにして、看護職者の行動およびその行動を方向づける高次の認知要因である信念に関する国際比較研究を行ってきた(平成 19 年度千葉大学 21 世紀 COE プログラム拠点報告書 2008)。日本・米国・英国・スウェーデン・タイ・韓国・中国を対象国として【看護専門職としての役割】【コミュニケーション】の 2 つの観点から訪問看護師/病棟看護師の看護職者の行動と信念を比較した結果、たとえば韓国との比較では、“理学療法士がいない場合、関節可動域訓練を行う”“家族の気持ちを支援するために時間をとる”など、多くの項目で日本との有意差がみとめられた。現在、この研究の延長として、文部科学研究費による「東アジア(日本・韓国・中国)における在宅での家族看護実践に関する国際比較研究」を継続している。その結果、日本と比べて韓国や中国では家族間のコミュニケーションがよくとられており、医療職が家族員間の意向の調整に関わることは少ないことが示唆

されている。

(4)さらに、日本における病棟看護師と訪問看護師の行動と信念を比較した結果においては(伊藤ら 2009)、“患者の死が近づいている場合、本人や家族に死後の処置や葬式に関する相談をする”“検査の結果や診断名が重篤な場合は、患者に認知症などがなく意識が清明でも、その内容を家族に最初に伝えるように手配する”等の行動は、訪問看護師のほうが有意によくとる傾向があった。

(3)、(4)の結果より、看護職者の行動や信念は、日本とその他の国、病院と在宅という異なる状況や文化の中で形成されていくことが示唆された。そこで次なる課題として、日本の訪問看護実践に特徴的な行動と信念、およびそれらに変化をもたらす要因を明らかにしたいという着想に至った。

引用文献

- 本田彰子他：在宅療養者および家族と訪問看護師との関係構築に基づく看護実践の構造 - 在宅療養者の看護支援のあり方を検討するメタ研究 - , 千葉大学看護学部紀要, 28, 17 - 21, 2006 .
- 王麗華, 木内妙子, 小林亜由美, 矢島正榮, 小林和成, 園田あや, 大野絢子：在宅看護現場において求められる訪問看護師の能力, 群馬パース大学紀要, 6, 91 - 99, 2008 .
- 松尾睦：経験からの学習 - プロフェッショナルへの成長プロセス - , 同文館出版, 60, 2006 .
- 西田ひろ子：人間の行動原理に基づいた 異文化間コミュニケーション, 創元社, 2003 .
- Nishida, H., et al.: Cognitive differences between Japanese and American in their perceptions of difficult social situations. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 29, 499-524, 1998.
- 千葉大学看護学部 COE 報告書作成委員会：平成 19 年度 千葉大学 21 世紀 COE プログラム拠点報告書 「日本文化型看護学の創出・国際発信拠点 - 実践知に基づく看護学の確立と展開 - 」, 58 - 59, 2008 .
- 伊藤隆子, 小笹優美, 辻村真由子他：日本の訪問看護師と病棟看護師の専門職としての行動とその規範の差異, 日本地域看護学会第 12 回学術集会, 2009 .

2. 研究の目的

日本の訪問看護現場においては、家族員間の関係性への働きかけ、医師との連携方法などにおいて、施設内とは異なる形での看護実践が行われている。これら訪問看護実践に特有な状況における行動やそれを導く信念の多くは、個々の看護職者の実践経験を通じて形成されていると考えられる。

そこで、訪問看護実践に特徴的な行動と信

念、およびそれらに変化をもたらす要因を明らかにすることを目的として本研究を実施した。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、訪問看護実践に内在する看護職者の行動と信念を明らかにするための研究<研究>、新人訪問看護師における行動と信念の経時的変化とその変化をもたらした要因を検討する研究<研究>の2段階で研究を構成した。

<研究>

訪問看護実践に内在する看護職者の行動と信念を明らかにするための研究

(1)訪問看護実践に内在する看護職者の行動と信念を明らかにするための文献レビュー

医学中央雑誌 web 版 Ver.5 を中心に用いて「訪問看護」and「学生」「新人」「特徴」「特性」「能力」「教育」「行動」「信念」などをキーワードにして、文献を収集した。

質的メタ統合の方法を参考にして文献に示された知見を分析し、訪問看護実践に内在する看護職者の行動と信念の特徴を示す要素を抽出した。

(2)訪問看護実践に内在する看護職者の行動と信念を具体的に明らかにするためのインタビュー調査

対象者：関東圏と関西圏の訪問看護ステーションに所属する訪問看護のエキスパート（訪問看護経験5年以上を有する、訪問看護認定看護師または訪問看護ステーションの管理者）および新人訪問看護師（病院での勤務経験を有し、訪問看護経験が半年～1年程度の看護師）。

対象者へのアクセス方法：訪問看護のエキスパートは日本看護協会のホームページ(<http://www.nurse.or.jp/nursing/index.html>)の訪問看護認定看護師登録者または研究者のネットワークから、新人訪問看護師は WAM NET (<http://www.wam.go.jp/>) の介護事業者情報に掲載されている訪問看護ステーションから、それぞれ探索した。

データ収集方法・内容：インタビューガイドを用いた半構造的インタビュー調査を実施した。インタビュー内容は、「利用者・家族とのかかわり」「看護職者としての役割」「他職種との役割分担・連携」「医療と生活のバランス」「病院看護と在宅看護の違いがゆえに経験した失敗談」などとした。インタビューの実施時間は40分～90分程度であった。インタビューの対象者の背景（性別、年齢、取得資格、教育背景、職歴、職位、勤務形態、所属する訪問看護ステーションの概要）については、属性調査票を記載していただき、情報を収集した。

分析方法：インタビューの逐語録を作成し、「訪問看護実践に特徴的な行動や信念」に関

連する語りを抽出して、コード化、カテゴリー化を行った。

倫理的配慮：各対象者に研究の趣旨と方法を説明し、自由意志での参加、匿名性の保持などについて口頭と文書を用いて説明し、署名により同意を確認した。調査は、研究者の所属機関における倫理審査委員会の承認を得て実施した。

<研究>

新人訪問看護師における行動と信念の経時的変化とその変化をもたらした要因を検討する研究

(1)新人訪問看護師を対象とした経時的なインタビュー調査

対象者：関東圏A県の訪問看護ステーションに所属する、病院・診療所等施設内での看護実践経験を1年以上有し、初めて訪問看護師として就職した看護師。

対象者へのアクセス方法：関東圏A県の197か所の訪問看護ステーションの管理者宛てに研究協力依頼書を配布し、施設として研究に協力いただける場合、対象条件に合う訪問看護師に研究協力依頼書・回答書を配布していただいた。研究の説明を受ける意志のある訪問看護師には、FAXにて研究者に回答書を返信していただいた。

データ収集方法・内容：インタビューガイドを用いた半構造的インタビュー調査を実施した。インタビューは、第1段階の研究結果から作成したインタビュー内容に、「訪問看護師を志したきっかけ」「一人で訪問できるようにするまでにステーションで受けた支援」を加えた自作のインタビューガイドを用いて行った。インタビューは、入職3ヶ月以内、入職6ヶ月後、入職1年後の3時点とした。2回目以降のインタビューの際には、前回のインタビューで語られた「訪問看護実践を通じて変化した行動や信念」に関連する内容を提示し、それに変化があったかどうか、変化があった場合はその変化をもたらした理由や経験についても尋ねた。インタビューの実施時間は1回40分～110分程度であった。インタビューの対象者の背景（性別、年齢、取得資格、教育背景、職歴、職位、勤務形態、所属する訪問看護ステーションの概要）については、属性調査票を記載していただき、情報を収集した。

分析方法：インタビューの逐語録を作成し、「訪問看護実践を通じて変化した行動や信念」に関連する部分を抜き出し、コード化、カテゴリー化を行った。行動や信念のテーマごとにそれらを形成した要因についても分析を行った。

倫理的配慮：各対象者に研究の趣旨と方法を説明し、自由意志での参加、匿名性の保持などについて口頭と文書を用いて説明し、署名により同意を確認した。調査は、研究者の所属機関における倫理審査委員会の承認を

得て実施した。

なお、上記の研究、と並行して、日本の訪問看護実践の特徴を考察するために、国際学会（第14回東アジア看護研究者フォーラム、第10回国際家族看護学会）に参加し、参加者との意見交換、および情報収集を行った。

4. 研究成果

(1) 研究：訪問看護実践に内在する看護職者の行動と信念を明らかにするための研究の成果

文献レビューにより、【利用者・家族の人生や生活を尊重して支援する】【内省して自己を高め続ける】など15カテゴリーの訪問看護師の行動と信念が明らかになった。

インタビュー調査は、訪問看護のエキスパート10名（関東圏5名、関西圏5名）新人訪問看護師1名に対して実施した。対象となった訪問看護師は全員女性であった。

分析の結果、「利用者・家族とのかかわり」における訪問看護実践に特徴的な行動と信念は、【家族を丸ごと看護する】【家族の歴史を変えようとしてはならない】【今の家族関係のありのままを受けとめる】【家族関係の情報収集では家族の語りを待つ】【利用者・家族の意見をまずは優先する】【利用者が納得してケアを受け入れるのを待つ】【家族が行ってきた介護方法を認め、徐々に指導を行う】【気持ちが揺れ動く家族を認め、支える】にまとめられた。以上より、訪問看護実践に特徴的な行動と信念として、家族全体をとらえ、家族の歴史や現在の姿を認め、利用者や家族の状態を見ながらケアや指導を行っていることが示された。

「看護職者としての役割」における訪問看護実践に特徴的な行動と信念は、【利用者の持っている能力を引き出すために他職種に働きかける】【家全体の環境を整える】【ジェネラリストである必要がある】【責任感を持ち、料金に見合ったサービスを提供する】【社会や地域における貢献を考える】などにまとめられた。

「他職種との役割分担・連携」における訪問看護実践に特徴的な行動と信念は、【医師への連絡のタイミング、依頼の仕方に注意する】【介護支援専門員（ケアマネジャー）にタイムリーに情報を伝えるように心がける】【病院と比べて他職種との関係は対等である】【他職種が他組織で働く職員であることを意識する必要がある】などにまとめられた。

「医療と生活のバランス」における訪問看護実践に特徴的な行動と信念は、【生活が見えやすいので利用者具体的な提案・助言をしやすい】【生活が見えすぎるがゆえに利用者に提案・助言をしにくい】【経済面を考慮してケア方法の提案をする必要がある】【病

院で受けた指導内容を家族の状況を踏まえてアレンジする必要がある】などにまとめられた。

(2) 研究：新人訪問看護師における行動と信念の経時的変化とその変化をもたらした要因を検討する研究の成果

訪問看護ステーション9か所から新人訪問看護師合計10名の研究協力が得られ、各対象者に対してインタビュー調査を実施した。対象となった訪問看護師は全員女性であった。インタビュー調査は対象者の都合（異動、家族の介護）により、経時的な調査ができたのは8名、1回のみインタビューとなったのは2名であった。

分析の結果、病院看護との違いとして語られた訪問看護実践における行動や信念は、【家族に踏み込みすぎてしまいそうになってしまう】【利用者・家族の話聞くだけでは看護だと思えない】【利用者・家族に働きかけるタイミングをつかみにくい】【病院のように日課通りに看護は行えない】【訪問看護師は黒子に徹する必要がある】【利用者のできているところに目を向け信頼関係を築く必要がある】【利用者や家族が継続できる看護目標を設定する必要がある】【ケアマネジャーとの役割分担が難しい】【コスト意識を持つ必要がある】などにまとめられた。

経時的なインタビュー調査により、上記の行動や信念に変化が起きたことが明らかになった。病院経験と対比した戸惑いや葛藤を示す【家族に踏み込みすぎてしまいそうになってしまう】【利用者・家族の話聞くだけでは看護だと思えない】などの信念は、家族からの言葉、管理者からの助言、先輩との同行訪問での学び、同僚とのカンファレンスなどによって、利用者・家族とのかかわり方がわかった、利用者・家族を一步引いて見ることができるようになった、自分をセーブできるようになった、長期的な視野をもってかかわれるようになったなどの自身の変化につながり、抱いていた戸惑いや葛藤がやわらいだことが明らかになった。

(3) 国際学会への参加を通じた日本の訪問看護実践の特徴の考察

第14回東アジア看護研究者フォーラムの参加者と訪問看護実践のあり方について意見交換を行った。具体的には、日本の家族は介護が大変だというイメージをもっていたり、人の死をイメージしづらくなっていたり、介護の準備性が整っていない家族が多いこと、訪問看護師はケアマネジャーとの家族支援における役割分担を難しく感じていることなど、日本の家族と訪問看護師の支援状況について話し合った。本研究の対象者からもケアプランと訪問看護実践の関係やケアマネジャーとの連携の難しさに関する内容が述べられており、日本の訪問看護実践の特

徴であると考えられた。

(4)まとめ・今後の展望

以上の研究、の結果より、日本の訪問看護実践に特徴的な行動と信念および、病院での勤務経験を有する新人訪問看護師における行動と信念の経時的変化とその変化をもたらした要因を明らかにした。

本研究成果を訪問看護師の実践を通じた能力開発過程の視点からさらに検討を行い、病院での勤務経験を有する既卒訪問看護師および病院での勤務経験を持たない新卒訪問看護師に対して必要な学習支援の方法を明らかにし、新人訪問看護師を育成するためのプログラム構築に活用していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

Mayuko Tsujimura, Kazuko Ishigaki:
Behaviors and Beliefs Observed in Visiting Nursing Practice in Japan - A focus on the relationship with home care recipients and families - . 35th International Association for Human Caring Conference, May 25, 2014, Kyoto International Conference Center, JAPAN.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

辻村 真由子 (TSUJIMURA, Mayuko)

千葉大学・大学院看護学研究科・講師

研究者番号: 30514252

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: